

カザフスタンの文化活動家

— チョカン・ワリハーノフのこと

田 中 克 彦

I

早くから中央アジア、シベリアの諸民族と接触をもっていたロシアの東洋学は、単なるイスラム研究やチューゴク研究ではなく、ユーラシア大陸の非ヨーロッパ諸民族全体の研究という性格をもっていたといえる。チューゴク研究は他のヨーロッパ諸国からはややおくれ、18世紀はじめからモンゴルを通過して北京に派遣された伝道団によって道が開かれた。征服と伝道のこのふたつの動きはべつべつのもではなかった。たとえば沿バイカルのエベンキ人やブリヤート人征服のばあいにみられるように、ヤサク徴収による政治・経済的支配が、部族の首長をつうじてのギリシャ正教への改宗をともなっていた。

ロシア東洋学のはばをきわめて広いものにしていくのは、ピョートル大帝時代にさかのぼるヨーロッパ諸国出身のすぐれた研究家の参加であり、なかには当時捕りよとしてシベリアにあって探険隊に加わったものもいた。スウェーデンの士官 **Stralenberg** はこのような身分のひとりであったが、各地の諸民族の言語のいちぢるしい類似から、いわゆるウラル語族とアルタイ語族という観念にはじめて到達した。¹⁾

ロシア東洋学がひととき活気をおびてきた19世紀に入ると、研究対象となっている諸地域の現在民族自体から研究者が生まれはじめていく。進歩的な数学者ロバチェフスキーが学長であったころのカザン大学は当時の東洋学を代表する、はなばなしい時代をむかえていた。すなわち40年代にはすでにアラビヤ語、ペルシャ語、タタール語、トルコ語、モンゴル語、マンジュ語、チューゴク語、アルメニア語、サンスクリット語、チベット語の講座がそろっており、そのあるものは、これらの言語を母語とする各民族出身者を講師にむかえていた。²⁾

これらの言語の研究は、民族自身の手でかかれた歴史文献への接近を容易にした。そのような文献研究の分野で注目された人に、カザン大学卒業生でブリヤート人のドルジーバンザロフがある。かれはチンギス=ハン石やミヌシンスク出土の碑子の解説で、ロシアだけでなく、ヨーロッパの権威であった **I. J. Schmidt** の説を批判した。また1854年に降ペテルブルクに住み、アルタン・トプチのテキストを世に送ったガルサン=ゴムボエフも同じくブリヤート人であった。この時代はまた、デカブリストやペトラシェフスキー団員のシベリヤ流刑があり、これらロ

- 1) Г. И. Рамstedт : *Введение в алтайское языкознание*. Москва, 1957 への Н. А. Ыскаков の序文より。
- 2) А. С. Шофман, Г. Ф. Шамов : *Восточный разряд Казанского университета. (Очерки истории русского востоковедения II Москва, 1956)*

シヤの進歩的思想の持主と流刑地の諸民族との交流という動きとも一致している。

このころカザフスタンで特異な研究活動をはじめていた若いキルギズ人の Чо кан・ワリハーノフがいた。

II

Чокан Балиханов (1835~65) についてはバルトリドの著書¹⁾ にわずかにふれてあり、また地理学者、探険家としてのかれの側面については、ソヴェト地理出版社から小冊子²⁾ が出されている。最近カザフ共和国で出版されたかれの選集³⁾ は、1904年、Н. И. Беселовский の監修で出されたものに未刊の原稿、書簡を加え、既刊のものも原稿にもとづいて訂正してまとめたものである。カザフ共和国科学アカデミー出版の紀要類には、かれを単に調査・研究家としてだけでなく、キルギズ民族の利益をまもるために積極的に発言した啓蒙主義的な文化活動家としてとらえる試みが発表されている。このカザフ版選集でも監修者 А. Х. Маргулан は「Чо кан・ワリハーノフの生涯と活動」という論文を巻頭において、この若くして世を去ったキルギズ人の一生を多角的にえがき出している。中央アジア併合の進行過程でワリハーノフの活動の意味を考えると、かずかずの興味ある事実が気がつく。

ワリハーノフは今日のカザフ共和国北西部、コクチェタフ地方の古いスルタンの家系にうまれた。父チンギスはロシアの教養ある人士と交友のある進取の気に富んだ人で、息子はまずカザフ人の私設学校に入れられた。ワリハーノフはそこでアラビア語、ペルシャ語等の東洋語を学び、チャガタイ文語の文献が読めるようになったという。スルタンの子は、

жеті журттын тілін білу——7つの民族のことはを知ることが必要であるという伝統が、この時なお力をもっていたことは興味深い。その後、12歳でオムスクのシベリヤ陸軍幼年学校に入学した。この学校は当時のシベリヤでは最高教育機関のひとつであり、しかもその学生のあいだには、ペトラシェフスキー団や、ゲルツェン、ベリンスキーの思想の影響が強く滲透していたという。また、カザン大学東洋学部出身のすぐれた教師も、この学校の空気を常に新しいものとしていた。

Г. Н. Потанкин との生涯を通じての友情は、この学校で同じく生徒であったときからはじまっており、幼いころからキルギズの英雄叙事詩を好んだワリハーノフの影響は、後のポターニンの研究ときりはないして考えることはできない。

ロシア文学を教えていた Н. Ф. Костылецкий は、有名なトルコ語学者でペテルブルク大学の教授であった И. Н. Березин の友であった。ワリハーノフが集めた何篇かのカザフの叙事詩は、かれを通じてペレジンに送られた。また、かれはベリンスキーの思想の宣伝家でもあった。このようにして、入学当時まで、殆んどロシア語を知らなかったワリハーノフは、またたく間にロシアのもっとも進歩的な思想に接するとともに、彼にとっては郷土研究にほかならない、中央アジア研究者としてのみちが開かれたのである。かれはまた、ロシア語を通じて西欧思想にもふれ、とりわけルソー、カーライル、ディケンズ、サッカーを特に好んで読んだといわれる。⁶⁾

1853年、18歳で幼年学校を卒業してまもなくかれの調査旅行がはじまった。1854年のガスフォルト將軍の探険旅行にくわわり、中央カザフ、セミレチエ、タルバガタイなどの地方をめぐる、キルギズ人の歴

- 1) 歐洲殊にロシアにおける東洋研究史 (外務省調査部訳) 1942.
- 2) И. Забелин : Чокан Валиханов. Москва, 1956.
- 3) Чокан Балиханов : Избранные произведения. Алма-Ата, 1958.
- 4) Н. М. Ядринцев : Воспоминания о Ч. В. ЗРГО, т. XXIX. によると言う.

史に深い関心をよせた。これらの民族の言語をよくした点で、従来の探険家の及ばなかった成果をえた。

この頃、オムスクはペトラシェフスキー事件政治犯の流刑地となり、ドストエフスキーもこの地に流されていた。オムスクに帰ったワリハーノフはかれと知りあっており、その友情はながく続いた。ドストエフスキーが、かれからどんな強い印象をえたかがその往復書簡からうかがわれる。

《研究をすてないでください。あなたは多くの材料をお持ちです。ステップのことを論文に書きなさい。あなたは将来を、ご自分の故郷にとって極度に有用であるようにおすごしになれます。たとえばステップとはどんなものか、ロシアにとってその意味とあなたの民族のことをロシアで解明することほど大きな目的、けだかい仕事がありましたらどうか。あなたは西欧的な教養を身につけた最初のキルギス（カザフ）人だということを忘れないでください。運命はあなたをその上、卓越した人とし、あなたに魂と心をあたえました。くれぐれもおくれをとらないように。》

翌1856年には Хоментовский の組織した探険隊に加わり、セミレチエ、天山地方を П.П.Семенов-Тянь-Шанский とともに旅した。セミョーノフがこの旅行に加わったことの意味は極めて大きく、この地方はロシア人の手によってはじめて科学的な記述をうけた。ワリハーノフはおそらくはセミョーノフを通じて Ritter や Humbolt の研究に接し、（かれはドイツ語でもこれらの地理学書を読んでいたらしい。）ペテルブルクの知名人とも接触を得たのである。この3か月間の旅行は《Дневник поездки на Иссык-куль》にくわしく、このときすでにカラ・キルギズの叙事詩《マナス》に注目している（258ページ）。また、《Очерки Джунгарии》にみられる。フローラ、ファウナの記述から歴史的な考察に至るまでの全面的な研究は、この旅行のときの資料にもとづいているようだ。

この探険の後まもなく、かれはロシア政府からの公式訪問としてクルジャ（伊犁）に入り、ここに3か月滞在した。この旅行は《Западный край китайской империи и г. Кульджа》として記述されている。この旅行では、中国国境地帯の諸民族のありさま、わずかの間に徹底的にラマ廟を破壊し去った猛烈なイスラムの嵐などにふれている。公式の用務である中・ロ両政府間に通商関係を整えるという目的は達せられ、タルバガタイ条約のいとうちを作り、クルジャとチュグチャクにロシア領事館開設の動機をなしたと評価されている。

このように見てゆくと、ワリハーノフの旅行は学術的な目的のほかに、ロシアからの公式用務をおびているばあいの多いことがわかる。この期の探険の特徴は、コーカンド、ヒワ、ブハラなどのハン国のロシアへの抵抗勢力がまだかなり残っており、それらに接近したところでは、しばしば軍隊に守られねば安全な調査、測量がおこなえなかったことである。軍隊は隊商を襲げきから守るために行動を共にすることもあった。これら軍事行動の対象となかなかない諸種族を平和的にロシアに帰順させたいという願いは、心ある人の多くが抱くものであった。

つづく1857年のアラタウのキルギズ人地帯への旅行は、ブグ族の首長にロシア政府からの贈物をとどけるとい公式の用をもっていった。この旅行は、かれをカラ・キルギズ人の文化にさらに深く近づけ、いわゆるカラ・キルギズとカイサク・キルギズ（すなわちカザフ）とが歴史的にも文化的にも起源を異にするものであるとの考えを抱くようになり、この点で混乱していたフンボルトの説に疑いをもった。また、草原アジアのイリアドと呼ばれる《マナス》の、世界最初の採取およびそのロシア語訳にとりかかったのも、この旅行においてであった。

中央アジア諸民族の叙事文学は、言語のうえにくみたてられた、かれらの生活と文化を反映する巨大な構成物であり、神話、伝説、世界観、歴史などの

網羅的、複合的統一体をなしている。ワリハーノフのキルギズ民族の歴史を再構成しようとする努力は、まずこれらの口碑・伝承の研究というつづきにむかった。のちに歴史文献の資料により強化されるが、口碑・伝承の重視は特徴的である。18世紀キルギズ草原におけるアバンチュリストの興亡、ジュンガリヤの歴史、シベリヤよりセミレチエへのキルギズ人移住の問題など、中央アジア現住諸民族の起源と歴史についてかれが扱ったテーマな多面的であり、しかも古文獻が語らない、したがって外国人の用いることのできない伝承にもとづく資料を豊富に用いている。かれが、書かれた資料と同等、あるいはそれ以上に口頭伝承の意味するところを重視していたことは、アンディジャン高原のキルギズ人起源問題の処理のしかたによく物語られている。⁷⁾

ワリハーノフの生涯中で最も劇的な旅行は1858年秋からのカシュガル行きであり、前年の旅行も、この大旅行にそなえてのいわば予備調査のようなものであった。古くからヨーロッパとアジアをむすぶ内陸交通路の要地であり、天山北路、南路のかなめであるこの町についての報告はきわめてわずかで、それもすでに歴史資料的な意味をもつにすぎなくなっていた。すなわち、ヨーロッパ人にしてはじめてこの町の記録を残したのはマルコ・ポーロであり(1272年)、《住民は手工業と商業で生活し、うつくしい庭園とぶどう園、畑をもち、大量の木綿が栽培されている。ここから多数の商人が世界各地に行商にかけている。》⁸⁾と書いている。その後この地がヨーロッパ人に訪れられて記録されるには1604年まで待たねばならなかった。その人はイエズイット教団団長であった、ポルトガル人の **Benedict Goës** であった。ゴエスの旅行により、ハンバリックと北京は

同じものであり、カタイの国とはチナにほかならないことが明らかになったのであった。バルトリドは《19世紀に至るまで、ゴエスの旅行は、盛んであった13世紀および14世紀と同じ程度にチューゴクの隊商路を再び利用しようとしたヨーロッパ人の企図中唯一のものであった》と評価している。⁹⁾

この禁断の地に16世紀になってやっとヨーロッパ人の足をふみ入れたのは **Adolf Schlagintweit** であったが、かれはまもなくこの地で消息を断つたため、この町は依然ヨーロッパ人から遠くへだてられていた。そのころ東トルキスタン一帯に回教徒の反乱が続発しており、ロシアにとっては、この国境に近い複雑な政治情勢にある地域のうごきを適確につかむことが必要であったし、一方ではシュラーギントワイトの安否をきずかう地理学者たちから、かれについてのたしかなニュースを手に入れるようにとの強い要望があった。このカシュガル行きの計画をたてたのは《天山の》セミョーノフなどであった。ワリハーノフこそが、この計画を実行するに最適任であるとされた。

ワリハーノフ一行はキルギズ人隊商をよそおって天山をこえ、ウイグル人、ドンガン人、キルギズ人などの清朝支配にたいするいわゆる回教反乱の報のみだれとぶ中を危険な旅をつづけた。この間のかれのくわしい日記はチューゴク領に入る直前、土中に埋められて難をまぬかれた。一行は無事にカシュガルに着いただけでなく、コーカンド・ハンの保護をうけ、翌年の春まで滞在した。かれはここでシュラーギントワイトの非劇的な最後のくわしい事情を聞き出すことに成功した。カシュガル・ボジャ、ワリハン・チュレにより首きりの刑に処され、その首は人頭塚に積まれたのだった。この悲しい知らせは、

1) キルギズ人起源もんだいについては、佐口透：キルギズ民族学序説（『民族学研究新2ノ1所収』）が参考になる。

2) 青木富太郎氏の訳文による。

3) 前掲訳書 172 ページ。

ワリハーノフによってはじめてヨーロッパに伝えられた。

カシュガルでは、かれがその調査を熱望していたヤルカンドやホータンの南路諸都市を訪れることは許されず、ただヤンギヒサル（英吉沙爾）にとどまってそれらの地の情報をあつめた。帰路はナリン河沿いにイシク・クルに出て、4月にはアルマ・アタに着いた。この時の旅行の記録は《Описание пути в Кашгар и обратно в Алатавский округ》となっており、カシュガル滞在中に得た成果は《Описание Алтышара или Кашгарии》として、この地方の民族構成、政治組織と政治的地位などの考察がまとめられている。

チューゴク領トルキスタンについて最新のニュースをたずさえて帰ってきたかれは、ペテルブルクにアジア局の一員としてむかえられた。大学、地理学協会に寄与するところも少なかったが、とりわけ地図の作製と修正で多くのことをなした。《中央アジアと東トルキスタン》、《バルハシ湖とアラタウ山脈の間の地域》、《チューゴク帝国西部》などの地図を残し、種々の言語で書かれた古地図の研究をおこなった。またかれは大学の講義に出席して、歴史や文献について体系的な知識をえようと常につとめていた。この頃のペテルクではチュルヌイシェフスキーやドプロリュエボフの影響のもとに思想界は活潑に動いており、ワリハーノフはそれらのグループの知識人とも知りあっていた。ロシア、従ってヨーロッパの学界にとっても、またワリハーノフ自身の思想形成のうえでも意義深いこのペテルブルクの生活はわずか2年間で打ちきられてしまった。1861年、ちょうど農奴解放令の出た年であった。

《この天才的なキルギス人スルタンが書いた旅行記その他の著作物は、前途多望を思わせたが、ワリハーノフはすぐに文化生活から去って、自分が

生まれた遊牧部落へ帰り、そこで死んだ。》とバルトリドが述べているように、¹⁾生まれつきからだの丈夫な方ではない上に過労の末、ついに故郷で静養をすすめられるほどになった。

III

かれをむかえた故郷の草原社会は、相かわらずイスラムの権威と帝政ロシア植民政策による欺瞞と貧困と無知と官僚の専横の支配する暗い悲しむべき姿をさらしていたにちがいない。草原に帰ったワリハーノフが、そこで短い生涯を終えるまでの何年間かは、最後のとりでを守って絶望的に抵抗する弱小ハン国が、ロシア軍の容赦ない攻撃により最後的にくずれ去るときと一致している。すなわち、1860年にはオレンブルク部隊とシベリヤ部隊がそれぞれの方面から攻撃を開始し、トルキスタンで合流した。1864年、ワリハーノフもその一員として加わっていた。チュルニャエフのひきいる遠征隊の南カザフスタンでの行動は、かれに致命的なショックとなった。流血の末、タシケントはロシア軍の手におち、ここにコーカンド・ハン国は壊滅したのである。その翌年かれはわずか30才で世を去っている。ロシアの進歩的思想に期待し、ロシア文化により回教支配を脱しようとのかれの願いは、この流血の征服により裏ぎられた。

故郷に帰ったワリハーノフが何を考えているかをくわしく知る資料は乏しいが、少なくとも1863年以後書いたと思われる、《О мусльманстве в степи》と、1864年の日付けのある《Записка о судебной реформе》の2篇が残されている。ベセロフスキーの版では検閲の目をまぬかれるため、いくらか語調をやわらげてある個所を、このカザフ版では、中央国立文学芸術文書局に保存されている原稿にもとづいて再構成してある。

1) 前掲訳書 524 ページ。

ワリハーノフはロシア政府の側からの不徹底な誠意のない改革案を、これらの論文において、するどく批判している。しかもその批判は、キルギズ人の社会、歴史、文化にたいする深い学識の上になつておこなわれている。

ロシア帝国内には人種的にも、また習慣、宗教の点でもいち様でない多数の民族が住んでいるので、ロシア人——定着生活をいとむ民族の基準から割り出した観念や法律を他民族特に遊牧民におしつけてはならないと述べ、《改革は必然的な進歩の法則にもとづいているときはじめて成功する》(198ページ)と言う。強制による性急なキリスト教への改宗にたいしては、かれはカストレンのことばをかりて、オスチャークがオビ河流域に移ったのは、その豊富な魚にひかれたのではない。ロシアの宗教、ロシアの宣教師をおそれたのである、と言っている。《未開で素朴な人民の意見よりも、貧弱な統計資料の方

をはるかに重視している》(202ページ)ロシア政府当局の改革案は《特権階級であるイスラム聖職者の意見を入れるにとどまり、じぶんの要求するてだてで知らぬ一般人民の利益をそこなっている》と政府案に反論するため、かれはカザフの慣習法を年2間にわたって、研究した。

ロシア帝国内でもキルギズ民族(すなわち両キルギズ)は、ヨーロッパロシアに住むタタル族(バシキル、ノガイを含む)が分散しているのに反して、広大な一定の地域に集中して住んでいる点で、またその居住地域は中央アジアの交易活動に占める役割りにおいても第1級の地位を占めていることを強調して、政府の方策に反省をうながしている。

ワリハーノフから100年を経た今日、カザフ民族もキルギズ民族もそれぞれ独立の共和国をもち、その固有の民族語による文化建設は量的にも質的にも無視できない成果を示しつつある。(1961.1.20記)